

第2章

ポスト「北方の三位一体」時代の 中国エヴェンキ族の生業適応

——大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例——

卯田 宗平

はじめに

中国東北部・大興安嶺森林地帯には、ツングース系言語を操り、トナカイ (*Rangifer tarandus*) を飼養しながら生計を維持するエヴェンキ族がいる⁽¹⁾。ツングース系民族⁽²⁾が住むシベリア・極北から東北アジアの生業様式を調べた人類学の成果によると、この地域の生業はその特徴に応じて大きく6つに分類することができる。それは①タイガでの狩猟、②北極海沿岸での海獣の狩猟、③アムール川などの河川流域での漁撈、④小規模のトナカイ群を交通手段として利用しながら狩猟に依存するタイガでの狩猟・トナカイ飼養、⑤肉生産を主目的とするツンドラでのトナカイ牧畜、⑥ステップおよび森林での牧畜と農耕、である(岡・境田・佐々木 2009, 308)。

このなかでトナカイ飼養はタイガとツンドラで行われている。ツンドラ地帯ではトナカイのエサとなる地衣類の繁殖が旺盛である。そのため、数千頭、数万頭のトナカイを飼養することができ、肉生産を主目的とするトナカイ牧畜のみで生活を営むことができる。

一方、南に行くにしたがってツンドラの要素はなくなり、針葉樹林帯が出現する。そこではツンドラのように広大な平原で大規模なトナカイ牧畜を展

開することができない。しかし、森林地帯にはさまざまな野生動物が生息している。そのため、大興安嶺のエヴェンキ族らは動物資源が豊富な森林地帯での「狩猟」と「漁撈」、そして荷駄運搬用や騎乗用としての「トナカイの飼養」といういわゆる「北方の三位一体」の生業様式を選択したのである。彼らの生業様式は上記の生業類型にあてはめると④に該当した。

ここで「④に該当した」と過去形で記したのには理由がある。それは、現在のエヴェンキ族らは「北方の三位一体」の生業様式を営んでいないからである。現在、彼らは移住・定住政策や大興安嶺天然林保護政策（「天保工程」）、地方政府による狩猟用の銃の没収などが原因で狩猟および漁撈活動を一切行っていない。

東北アジア地域におけるトナカイ飼養の中心は、すでに述べたように地衣類が豊富で大規模にトナカイを飼養できるツンドラである。大興安嶺ではトナカイ飼養のみで生活はできず、森林地帯での狩猟や漁撈を組み入れなければならない。その意味で、大興安嶺のトナカイ飼養は「周縁的存在」（今西・伴 1948, 147）といえる。トナカイ飼養の周縁性に関しては、「温量指数」なる気候指標³⁾を用いて大興安嶺の自然環境を検討した川喜田二郎によっても指摘されている（川喜田 1996, 81-102）。川喜田は「地衣原を普遍的に見いだすのは、（筆者注：温量指数が）やはり35度線以北に限られている。そしてこの地衣原こそ、トナカイの常食飼料、とくに冬の飼料として欠くべからざるものである」（川喜田 1996, 86）とし、「トナカイを飼う民族の活動範囲がこの35度線をもって限度としている」（川喜田 1996, 89）という。すなわち、温量指数の35度線をもって取り囲まれている大興安嶺森林地帯は、東北アジア地域におけるトナカイ飼養の南限であるというのである。

このように、大興安嶺はトナカイ飼養の世界のなかでは「周縁的存在」である。それゆえ、そこでのトナカイ飼養は「後背地としてのシベリアの馴鹿もしくは馴鹿オロチョンの支持なくしては、その持続的生存が期待できない」（今西・伴 1948, 147）とまでいわれ、極めて不安定な環境で行われているのである。こうした自然条件に加えて、2003年以降は「北方の三位一体」の

なかで狩猟と漁撈という「二位」もなくなった。

こうした生業様式の変容のなか、森林地帯で狩猟を行う際に騎乗用や荷駄運搬用として利用されてきたトナカイはその役割を終えたかにみえた。しかし、エヴェンキ族らは狩猟と漁撈を行なわなくなった現在でもトナカイの飼養を続けている。

彼らがいまでもトナカイの飼養を続けるのはその角を採取するためである。中国ではおもに自然由来の産物からなり、体質の改善や体調の維持のために服用される薬を「中薬」と総称する⁽⁴⁾。中国ではこの「中薬」の市場が発達しており、トナカイの角にも「補精神」（精力を増強する）や「助腎臓」（腎臓の機能を助ける）、「強筋健骨」（筋肉や骨格を強く健康的なものにする）といった効能があるとされる。そして、中国ではこれらの薬効をもつとされるトナカイの角に高い商品価値がつく。こうした状況のなか、エヴェンキ族らはかつて駄獣や乗用獣であったトナカイを殺さず、毎年生え替わるトナカイの角を仲買人や観光客に販売することで生計を維持しているのである。

スカンジナビア三国やシベリアにおけるトナカイ飼養では1世帯当たり数百頭から数千頭ものトナカイを飼育し、その肉を得るという目的で続けられている（たとえば、葛野 1990; 吉田 2003; 高倉 2000）。また、役畜として利用する数頭の個体を除き、人びとは基本的にトナカイの生態に介入しない。

一方、大興安嶺でトナカイ飼養を続けるエヴェンキ族らはトナカイを屠殺することはない。また、彼らは後述する odachi 技術（馴化個体をつくる技術）によってトナカイの生態に積極的に介入し、人間との親和性を確立させようとする。これは、角を採取するために至近距離で接近する人間を恐れない馴化個体をつくることが重要であると考えているからである。

このように、とりまく生業環境が大きく変化するなかで大興安嶺のエヴェンキ族らはいかに対応したのであろうか。これまで、中国のエヴェンキ族らによる対応の実際はくわしくわかっていない。

そこで本章では、大興安嶺でトナカイ飼養を続けるエヴェンキ族らを対象に、ポスト「北方の三位一体」時代ともいえる現代を生き抜くための飼養技

術を検討するとともに、大興安嶺においてトナカイ飼養を可能とする背景要因を明らかにする。とくに、飼養技術の検討にあたっては、彼らが既往技術を援用しながら、いかにしてトナカイの生態に介入し、親和性を確立させているのかという点に注目したい。そのうえで、エヴェンキ族らが既往技術の援用で新たな生業環境に適応できた理由を考察する⁵⁾。

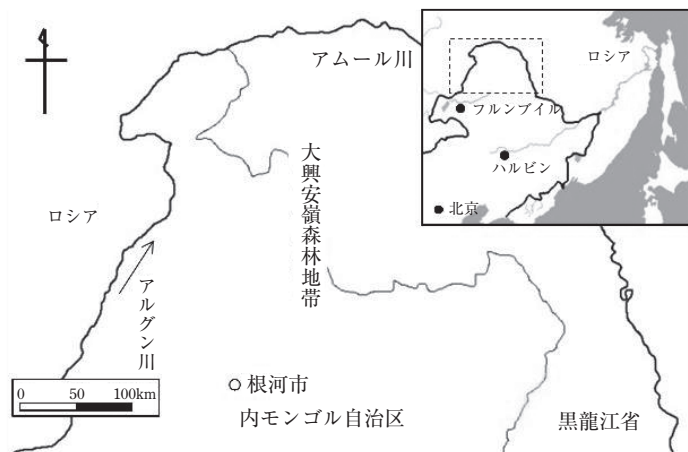
第1節 大興安嶺におけるトナカイ飼養

1. 調査地の概要

まずは調査地の概要を明示しておく。調査対象地は内モンゴル自治区呼倫貝爾市根河市（図1）のE郷である。E郷がある根河市は北緯50度20分から50度30分、東経120度12分から122度55分に位置し、南北が240.4キロメートル、東西が198.8キロメートル、面積は約2万平方キロメートルである。市の平均海拔は1000メートル前後である。この市は大興安嶺森林地帯の西側に位置し、市の面積に占める森林被覆率は70%を超える。市の名前にもなっている根河は大興安嶺の伊吉奇山の西南側を水源とする全長427.9キロメートルの河川である。

この根河市のひとつの特徴は内モンゴル自治区のなかで年平均気温が最も低いことである（根河市史志編輯委員会 2007, 70）。表1は、根河市の月別の平均気温と降水量をまとめたものである。根河市の年間の平均気温はマイナス5.3℃である。1月の平均気温はマイナス30.4℃であり、年間を通じて最も低い。一方、平均気温が最も高い月は7月である。根河市が属する呼倫貝爾市の気象局は、この地域の気象条件に合わせて四季を以下のように定義している。それは、日の平均気温が0℃を上回ると「春の始まり」とし、0℃を下回ると「秋の終わり」とする。また、日の平均気温が15℃を上回ると「夏の始まり」とし、15℃を下回ると「夏の終わり」とする。

図1 大興安嶺森林地帯の位置



(出所) 筆者作成。

表1 根河市の月別の平均気温および平均降水量

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
気温 (°C)	-30.4	-26.1	-15	-1.8	7.6	14.1	16.5	13.8	6.7	-3.1	-17.4	-28.2
降水量 (mm)	3.2	3.5	6.8	17.4	32	67.3	126.5	101.1	53.1	12.5	8.1	5.9

(出所) 根河市史志編輯委員会 (2007) より筆者作成。

呼倫貝爾市気象局の定義をふまえると、根河市の四季は夏季が約20日間、春季と秋季が約125日間、冬季が約220日間となる。また、根河市の年間の降水量は437.4ミリメートルである。6月から9月までの降水量は348ミリメートルで年間降水量の79.5%を占める。このように、根河市を含む大興安嶺の気候は雨が多くて短い夏季と寒くて長い冬季を特徴とする。

つぎに根河市の人口をみてみたい。市の定住人口は16万7228人（男性が50.6%、女性が49.3%）である。市の総人口に占める漢族の割合は88.2%である。根河市には、大多数を占める漢族のほかにモンゴル族（根河市総人口に占めるモンゴル族の割合は5.9%）や満族（2.4%）、回族（2%）、ダウール族（0.5%）、

朝鮮族（0.3%）、エヴェンキ族（0.2%）など計17の少数民族がいる（根河市史志編輯委員会 2007, 95-96）。現在、根河市には多くの漢族が定住しているが、これは清末に入植抑制政策が崩壊し、山東省や河北省から漢族が大量に移住してきたからである。

本章で取り上げる E 郷は根河市の中心部から 4 キロメートル離れた位置にある。この郷には計 59 戸、162 人が住む（2012 年時点）。表 2 は、E 郷の住民の年齢構成と民族をまとめたものである。この郷にはエヴェンキ族が計 107 人（全体の 66%）、それ以外の人びとが計 55 人住んでいる。表 2 をみてもわかるが、29 歳以下の人口は計 58 人であるが、そのなかでエヴェンキ族は 48 人（割合にして 83%）である。とくに 9 歳以下の子どもはひとりを除いてすべてエヴェンキ族である。一方、その親世代といえる 30 歳から 59 歳までの人口は計 85 人であるが、そのなかでエヴェンキ族は 47 人（割合にして 55%）である。

このように年齢区分別でエヴェンキ族の割合が大きく異なるのは、少数民族に対する中国政府の優遇政策が影響していると考えられる。現在、中央政府は民族地区における少数民族の発展を重視しており、彼らに対して各種の

表 2 E 郷の住民の年齢および民族構成

(人)

年齢 (歳)	男性		女性	
	エヴェンキ族	それ以外	エヴェンキ族	それ以外
80～	—	—	3	1
70～79	2	—	1	1
60～69	1	4	5	1
50～59	2	4	5	1
40～49	7	9	8	6
30～39	12	9	13	9
20～29	8	3	10	1
10～19	9	1	9	4
～ 9	6	1	6	—
計	47	31	60	24

(出所) 現地調査の結果より筆者作成。

優遇措置を実施している。とくに、民族の総人口が30万人を下回る28の少数民族に対しては社会保障や学校教育、医療などの面でさまざまな優遇がなされている。そのため、たとえばエヴェンキ族と漢族のふたりが結婚した場合、生まれた子どもをエヴェンキ族とすることで各種優遇措置を享受しようとする人が多いのである。

表3はE郷内の39世帯の夫婦の民族をまとめたものである。夫婦ふたりが同じ民族の世帯は計11組ある。具体的には、エヴェンキ族同士の婚姻が8組、漢族同士の婚姻が2組、モンゴル族同士の婚姻が1組である。一方、夫婦ふたりが異なる民族の世帯は計28組ある。具体的には、夫がエヴェンキ族で妻が漢族の世帯が7組、夫がエヴェンキ族で妻がオロチヨン族の世帯が1組、夫が漢族で妻がエヴェンキ族の世帯が16組、夫が漢族で妻がロシア族、夫が漢族で妻が満州族、夫がロシア族で妻がエヴェンキ族、夫がモンゴル族で妻がエヴェンキ族の世帯が各1組である。

表3から夫婦の民族に関して以下の4点を指摘しておく。①夫婦ともエヴェンキ族の世帯は8組のみであり全体の約2割でしかない。②夫が漢族、妻がエヴェンキ族の世帯は16組ある。これは漢族の男性がE郷に婚入してくるケースが多いことを示している。③夫がエヴェンキ族、妻が漢族の世帯も7組あり、漢族の女性がE郷に婚入してきたケースも少なからずある。④E郷の人口においてオロチヨン族やロシア族、モンゴル族、満州族が占める割合は、エヴェンキ族と漢族のそれに比べて少ない。

表3 E郷における夫婦ふたりの民族

		(組)						
夫 \ 妻	エヴェンキ族	漢族	オロチヨン族	ロシア族	モンゴル族	満州族	計	
エヴェンキ族	8	7	1	—	—	—	16	
漢族	16	2	—	1	—	1	20	
ロシア族	1	—	—	—	—	—	1	
モンゴル族	1	—	—	—	1	—	2	
計	26	9	1	1	1	1	39	

(出所) 表2に同じ。

2. 「北方の三位一体」の終焉

大興安嶺のエヴェンキ族らは定住や移住政策、集団化政策、天然林保護政策などの影響を大きく受けながら生活を営んできた。ここでは、大興安嶺で狩猟やトナカイ飼養に従事してきたエヴェンキ族らの生活様式がいかに変容してきたのかをみておきたい。

彼らの生活様式は定住・移住政策の実施に応じて3つの段階に分けることができる。3つの段階とは、(1)奇乾における定住（1957年から）、(2)滿歸鎮への移住（1965年）、(3)根河市中心部への移住（2003年）である。以下では、筆者の調査および既往研究の成果（中国人民大会民族委員会辦公室 1958；秋 1962；カ 2006；祁 2006；王 2012）をふまえ、「北方の三位一体」が終焉を迎えた過程をみてみたい。

(1) 奇乾における定住（1957年から）

1957年2月、呼倫貝爾盟第2回人民代表大会においてアルゲン川右岸の奇乾にE郷を建設することが決定された。旧ソ連との国境沿いに住居を新たに建設し、エヴェンキ族らを定住させる政策は、狩猟と漁撈、役畜としてのトナカイの飼養で生計を維持してきた当人たちの生活様式を大きく変えるものであった。なぜなら、彼らはそれまで定まった住居をもたず、大興安嶺森林地帯において移動を繰り返しながら狩猟活動を行っていたからである。ただ、定住先に指定された奇乾はエヴェンキ族らにとってまったく見知らぬ土地ではなかった。

旧ソ連と隣接する奇乾では、当時、交易市が1～2カ月に一度開かれていた。奇乾での交易市において、エヴェンキ族らは狩猟活動で得た肉や角、皮製品を販売し、生活用品や狩猟道具などを購入していたからである。奇乾において彼らの交易相手は旧ソ連人であった。旧ソ連人はヘラジカの角や燻製肉、女性がつくる皮製の手袋や靴、服などを購入していた。とくに、彼らは

左右対称のヘラジカの角を壁飾り用として高値で購入していたという。

一方、エヴェンキ族らは旧ソ連人から銃や銃弾、薬きょう、タバコ、パン、酒、茶、葉、小麦粉、塩、砂糖、フライパンなどを購入していた。当時、彼らは狩猟で使用する銃弾と薬きょう、主食であるパンの原料となる小麦粉を多く購入していたという。奇乾での交易では中国人民元をもたない旧ソ連人が多くいたため、おもに物々交換によって必要品を入手していた。

1957年に奇乾に建設されたE郷には30～40世帯、200人前後が定住を始めた。E郷には木造の家屋のほか、寄宿制の学校や衛生院（病院）、日用品を販売する商店、食料販売店などがあった。商店や食料販売店は漢族が経営していたという。この時代、狩猟活動に従事するエヴェンキ族らは奇乾に住居をもちつつも大興安嶺に点在するキャンプ地を拠点とし、そこで狩猟を続けていた。この時代、彼らは荷駄運搬用や騎乗用として1世帯当たり10頭前後のトナカイを飼育していた。そして、彼らはキャンプ地で燻製肉や皮製品を準備し、1～2カ月に一度開かれる交易市に合わせて奇乾まで戻り、それら商品を販売していた。彼らが奇乾に定住した後もしばらくのあいだは旧ソ連人が交易のおもな相手であった。

その後、旧ソ連のフルシチョフによる平和共存路線の提起やスターリン批判に端を発した中ソ関係の悪化は、旧ソ連人を交易の相手として成立していたエヴェンキ族らの狩猟活動にも少なからず影響を与えた。中国共産党指導部は1960年4月に旧ソ連の平和共存政策（対米接近政策）を修正主義だとして強く非難した。これに対して旧ソ連は中国指導部によるこの声明に激しく反発し、1960年7月より中国に派遣していた技術者や専門家、その家族を引き上げさせた。

こうした中ソ関係の悪化によって、旧ソ連人は交易市が開かれる奇乾と自国との自由な往来ができなくなった。この結果、エヴェンキ族は交易の最大の相手を失うことになった。ただ、エヴェンキ族と旧ソ連人との交易が難しくなった頃から中国の漢族が奇乾までやってきて、燻製肉や皮製品を購入するようになった。その後、漢族は奇乾のE郷に商店を開き、そこで日用品

を販売するとともに狩猟の獲物や皮製品の買い取りも始めた。エヴェンキ族と漢族の売買関係は中ソ関係が悪化し始めた頃から密になったのである。

(2) 満歸鎮への移住 (1965年)

1964年、根河市地方政府は奇乾に住むエヴェンキ族らに対して2回目の定住政策を実施した。政府は、根河市阿龍山鎮に住居や食堂、衛生院などを整備した臨時の居住地を建設し、まずそこにエヴェンキ族らを移住させた。その後、根河市政府は1966年5月に根河市満歸鎮⁶⁾の中心部から17キロメートル離れた場所に新たなE郷を建設し、阿龍山鎮に住むエヴェンキ族らを満歸鎮に再度移住させた。このE郷には、30戸の木造家屋のほか、郷政府や学校、医療施設、商店、食料販売店、銀行、郵便局などがあった。このなかで商店や食糧店などは漢族が経営していた。この郷にはエヴェンキ族や漢族のほか、モンゴル族、ロシア族などの少数民族も住んでいた。

また、この時代、大興安嶺の豊かな森林資源を利用した木材加工工場も敷地内に建設された。1970年代初めにはE郷の総人口が378人であったが、そのなかで木材加工業やサービス業に従事するものが215人であった。

この地では集団化政策の影響を大きく受けることになった。具体的には、エヴェンキ族らによる大興安嶺での狩猟活動が組織化され、また狩猟活動以外にも農耕や家畜飼育も始めるようになった。

1967年、E郷では人民公社が設立され、その下部組織として「東方紅猟業生産隊」が組織された。そして、大興安嶺森林地帯で狩猟活動を続けるエヴェンキ族らはすべて東方紅猟業生産隊に所属するようになった。実際の狩猟活動は、生産隊の下部にあるいくつかの生産小隊をひとつの単位として行われるようになった。人民公社の設立以降、狩猟道具やトナカイといった生産手段の私的所有は認められず、それらはすべて集団の所有物となった。そして、集団所有となったトナカイは個々の生産小隊によって管理されるようになった。加えて、集団化政策が実施されると燻製肉や皮製品を個人で販売することも禁止され、そうした商品は東方紅猟業生産隊によって買い取られる

ことになった。

この時代、大興安嶺には5つのキャンプ地があり、そこで狩猟が続けられていた。狩猟に従事するものに対しては日々の労働に応じた給与が支払われるようになった。また、年間を通じて多くの獲物を捕獲した生産小組には年度末（春節前）にボーナスも支給された。

この時代のもうひとつの変化は、地方政府による「大興安嶺での狩猟活動を中心に、農業や牧畜も行うこと」という指示のもと、エヴェンキ族らも農作物の栽培や家畜動物の飼育を開始したことである。彼らは、政府の指導のもとで温室を建設し、そこでハクサイやキュウリ、トウガラシ、コムギ、トウモロコシなどを栽培した。しかし、満歸鎮は大興安嶺の北西部に位置し、年間の平均気温は0℃以下であり、夏季は短く、年間の降雪日は160日を超える。こうした厳しい気候条件下で農作物を栽培することは困難であった。上記の作物のなかでコムギとトウモロコシの栽培は成功しなかったという。このほか、彼らは畜舎を建設し、そこでウシやウマ、ブタの舎飼も始めた。

その後、1970年代末に集団化政策が終了し、人民公社も解体された。ただ、彼らの生活様式に大きな変化はなかった。彼らは当時もE郷に住居をもちつつ、点在するキャンプ地を拠点に狩猟活動を続けていた。また、集団化時代の「東方紅獵業生産隊」は名称が変更され「獵業生産隊」となったが、その機能は維持されたままであった。集団化政策の終了後も「獵業生産隊」の職員は大興安嶺に点在するキャンプ地を定期的にトラックで回り、山で生活する人びとに日常品を届けるとともに、狩猟された肉や皮製品を回収していた。

(3) 根河市中心部への移住（2003年）

2003年8月、それまで満歸鎮で生活していた人たちは「生態移民」として根河市中心部に新たに建設された現在のE郷に移住することになった。これは、天然林保護工程が実施されている大興安嶺で狩猟を行うエヴェンキ族らを生態移民として根河市中心部に移住させることを市政府が決定したから

である。

ここでいう「生態移民」とは特定の人びとに対する移住政策のひとつである。特定の人びとを「生態移民」として移住させる理由は大きくふたつある。ひとつは、ある地域の自然環境を保護することを目的に、もともとそこに住んでいた人びとを別の場所に移住させることである。もうひとつは、環境劣化の影響で生活水準が低下した住民を別の場所に移住させることで生活の改善をめざすものである（孟・包 2004）。

このように、生態移民政策は生態環境の保護と農・漁・牧民の貧困対策というふたつの目的が内包されており、「生態環境を保護するための各種政策のなかで、生態移民政策はコストが比較的少なく、かつ効果が大きいもののひとつである」（孟・包 2004, 49）とされている。満歸鎮から根河市中心部にエヴェンキ族らを移住させた生態移民政策は、森林環境の保護と少数民族の生活水準の向上をめざしたものであり、上記のふたつの目的を内包したものである。

根河市政府は2002年に市中心部より3キロメートル離れた林場に新たな住居を建設した。敷地内に建てられた木造の家屋は1階部分が50平方メートル、2階部分が38平方メートルあり、室内にはキッチンやトイレ、温水シャワー室などが完備されている。また、上下水道や電気、有線放送（テレビ）なども整備されている。このほか、敷地内には保健所や老人ホーム、小学校、郵便局、銀行なども建設された。そして、2003年8月、この地に満歸鎮からエヴェンキ族や漢族、モンゴル族の人たちが移住してきたのである。

根河市への移住とともにエヴェンキ族らの生活様式は大きく変化した。最大の変化は狩猟用の銃の所有が禁止されたことである⁷⁾。それまで、銃の所有はすべて免許制であり、狩猟に従事するエヴェンキ族らの男性のみが所有していた。エヴェンキ族らはそれまでも定住や移住を繰り返してきたが、その生活の基本はあくまでも大興安嶺における狩猟活動であった。

しかし、銃の所有が禁止されたことにより森林地帯での狩猟活動は終了し、「猟業生産隊」も解散した。また、新たに建設されたE郷は大興安嶺から離

れているため、森林地帯を流れる河川での漁撈活動も行われなくなった。これにより、エヴェンキ族らが大興安嶺で長年続けていた「北方の三位一体」の生業様式は終了したのである。

3. トナカイ飼養のいま

(1) キャンプ地におけるトナカイ飼養

狩猟用の銃の所有が禁止された2003年以降、エヴェンキ族らは狩猟活動を終了せざるを得なくなった。狩猟活動の終了とともに、狩猟時の荷駄運搬用や騎乗用としてのトナカイもその役割を終えたかにみえた。しかし、彼らは今でもトナカイの飼養を続けている。ここでは、まず中国のエヴェンキ族らによるトナカイ飼養の現状を概観する。つぎに、トナカイ飼養の年間の生業暦をまとめる。そのうえで、ポスト「北方の三位一体」時代を生き抜くための飼養技術についてみてみたい。

大興安嶺においてエヴェンキ族らが管理するトナカイは南モンゴルから北モンゴルおよびアルタイ山脈に分布するもので、シベリアの森林トナカイと呼ばれるものである。2012年現在、大興安嶺にはトナカイキャンプ地が計8カ所ある。表4は8カ所のキャンプ地の名称とトナカイ飼養に従事している人たちの属性、地点、所有するトナカイの頭数をまとめたものである。

キャンプ地でトナカイ飼養に従事するものは計29人（男性14人、女性15人）である。彼らの平均年齢は47歳である。最高齢はMLYS キャンプ地のMLYS氏（女性）で90歳である。最も若いものはMLYS キャンプ地のMR氏（男性）で20歳である。一般にキャンプ地の名称は、そこに滞在するメンバーのなかで最年長の女性の名前を使用する。MLYS やDML, BDX, SYL, BLJYといった名称はいずれも年長女性の名前である。一方、DW, SS, YSHは最近になってトナカイ飼養を始めた世帯で構成されているが、彼らのキャンプ地の名称は世帯主の男性の名前を使用している。トナカイ飼養に従事している人たちの民族をみてみると、エヴェンキ族が21人、漢族が5人、モンゴル族が

表4 8カ所のトナカイキャンプ地の名称と構成員

名称	構成員	地点	所有数
MLYS	計6人(男性4人, 女性2人), 平均年齢: 56.8歳 民族: エヴェンキ族5人, 漢族1人	阿龍山	300~400
DML	計7人(男性2人, 女性5人), 平均年齢: 45.7歳 民族: エヴェンキ族6人, オロチョン族1人	達頼沟	140~150
DW	計2人(男性1人, 女性1人), 平均年齢: 42.5歳 民族: エヴェンキ族	嘎拉牙	80
SS	計3人(男性1人, 女性2人), 平均年齢: 43.3歳 民族: エヴェンキ族	烏力庫瑪	30
BDX	計3人(男性2人, 女性1人), 平均年齢: 41.3歳 民族: 漢族2人, エヴェンキ族1人	上央格気	40~50
YSH	計2人(男性1人, 女性1人), 平均年齢: 44.5歳 民族: モンゴル族	阿龍山	20~30
SYL	計2人(男性1人, 女性1人), 平均年齢: 35.5歳 民族: エヴェンキ族, 漢族	得耳布	40
BLJY	計4人(男性2人, 女性2人), 平均年齢: 51.7歳 民族: エヴェンキ族3人, 漢族1人	阿龍山	40

(出所) 表2に同じ。

2人, オロチョン族が1人である。

キャンプ地の構成員が最も多いのはDMLキャンプ地であり, その数は7人である。次いでMLYSキャンプ地で6人である。一方, DW, SS, BDX, YSH, SYL キャンプ地はそれぞれ2~3人である。構成員の多さはそこで飼育するトナカイの数の多さとも関係する。キャンプ地で飼養されているトナカイは計700~800頭であるが, 最も多くトナカイを飼育しているのはMLYSキャンプ地である。その所有数は300~400頭である。次いでDMLキャンプ地が140頭前後を所有している。一方, トナカイ飼養に従事するものが少ないYSHやSSキャンプ地では所有数が20~30頭程度である。

トナカイ飼養に従事するものは郷政府が無償で提供するテントを利用できる。また, 森林地帯に点在する各キャンプ地には敷地内に太陽光発電装置があり, それで得た電気でテレビやラジオも使用できる。以下でも述べるがエヴェンキ族らはキャンプ地の周辺にトナカイのエサとなるトナカイゴケ

(*Cladonia rangiferina*) が少なくなるとキャンプ地を移動する。移動にはテントやベッド、テレビ、薪を燃料とする暖房器具などの運搬を伴う。そのため、かつて彼らはキャンプ地を移動する際、荷駄運搬用のトナカイを使用していた。現在、彼らは郷政府によって貸し出される大型トラックを使用している。

(2) トナカイ飼養の年間の生業暦

つぎにトナカイ飼養の年間の生業暦をみておきたい。トナカイ飼養の基本はエヴェンキ族らの言葉を借りれば onno と sanfang である。onno とは山中でエサを食むトナカイを探して、群れをキャンプ地に寄せ集めてくる作業のことである。この onno 作業は年間を通じて行われる。一方、sanfang とはキャンプ地においてトナカイを無理には繋留をせず、ほうっておくという意味である。ここでは DML キャンプ地の事例を中心にしながら onno と sanfang に特徴づけられるトナカイの年間の生業暦をみてみたい。

エヴェンキ族らは山中でエサを食むトナカイを探す作業 (onno) を繰り返して行く。大興安嶺が雪に覆われる11月から3月にかけて、彼らは雪上に残された足跡 (oja) などを手がかりにしながら徒歩でトナカイを探す。森林のなかで群れているトナカイをみつけると、5～7人が一組となってその群れを囲い込み、群れのなかにいる数頭のメスをまず捕まえる。そして、捕まえたメスを紐で引きながらキャンプ地まで連れ戻す。すると、ほかのトナカイも先導するメスを追従するかたちでキャンプ地まで戻ってくる。

トナカイの群れをキャンプ地まで連れ戻した後、彼らはそのトナカイに塩を与える。手のひらの塩をなめにきたトナカイを1頭1頭なでやりながら、各個体の体調や怪我の有無などを確認する。彼らは、トナカイをキャンプ地まで連れ戻した後、数頭のメスを紐で木に繋ぎ止める。一方、オスは繋留せずにほうっておく。このため、連れ戻されたトナカイのなかにはすぐにエサを求めて森林のなかに戻る個体もいる。彼らは再び森林のなかに入っていくトナカイに対してとくに何もしない。

トナカイを連れ戻した後、数日が過ぎると木に繋留していたメスも放つ。

するとそのメスも森林のなかに入っていく。やがてキャンプ地のまわりにトナカイが1頭もいなくなる。その後、彼らはどこかに移動したトナカイを探しに出るのである。冬季、onno作業は7～10日に一度ほど行われる。彼らはスノーモービルなどを使用せず、雪上を徒歩で移動する。時には何日もトナカイを発見できない日が続くこともある。

4月中旬になるとトナカイは出産のシーズンを迎える。トナカイは平坦な場所を好んで出産する。そのため、エヴェンキ族らは毎年4月上旬になるとキャンプ地を平坦な場所に移動させる。また、この時期になると、出産を控えた腹の大きな母トナカイ（nyanmi）を探し、キャンプ地まで連れ戻す。これは、母トナカイにできるだけキャンプ地の近くで出産させるためである。母トナカイがキャンプ地から遠く離れた場所では出産すると、つぎに述べるodachi作業（人間に馴らす作業）ができないからである。

出産シーズンが終わり、5月下旬になるとトナカイの角を切る作業が行われる。トナカイの角は毎年晩冬のころに脱落したあと新生し、5～7月にかけてさらに大きくなる。この時期の角は皮膚に覆われており、柔らかいこぶ状である。8月を過ぎると角を覆う皮膚が落ちる。皮膚が落ちた角の商品価値は5～7月頃の柔らかい角のそれよりも低い。そのため、5～7月にトナカイの角を切断し、仲買人に販売するのである。

トナカイの角を切断する作業はすべて男性によって行われる。この時期、彼らは大きな角をもつトナカイを群れのなかから探し出して捕まえ、数人の男性が抱え込む。そして、小型のノコギリで角を切断するのである（写真①）。血液が循環しているこの時期の角はノコギリで根元から簡単に切断できる。角を切断したあと、彼らはトナカイの頭部の切断面が化膿しないように灰を擦りつける。その後、切り取った角の重さを量り、その角を仲買人に販売するか加工工場に運ぶのである。

6月下旬になり気温が上昇すると山中では蚊やアブ、ブユが発生する。森林内で蚊が発生するこの季節、彼らはrarupukaと呼ぶオオミズゴケ（*phagnum palustre*）を集め、キャンプ地周辺で乾燥させる。そして、ある程度乾燥



写真① トナカイの角を採取する作業。数人の男性がトナカイを押さえ込み、ノコギリで角を切断する。
(2010年7月、筆者撮影)

させたオオミズゴケに火をつけて煙を起こす。煙には除虫効果があるという。実際、キャンプ地周辺の3～4カ所で煙を起こすと、蚊やアブを嫌がるトナカイが森林内から煙のまわりに集まる。この時期、彼らは1日中 rarupuka を燃やし続ける。

もちろん、トナカイのなかにはキャンプ地から遠く離れた場所にエサを求めて移動し、キャンプ地に戻らない個体もいる。そのため、彼らは3～5日に一度ほど onno 作業を行う。夏季にトナカイを探す作業は冬季のそれよりも難しいという。それは、冬季になると雪上に残されているトナカイの足跡を追って移動ルートのある程度特定できるが、夏季はトナカイの足跡をほとんど判別できないからである。トナカイの移動の痕跡が少ない夏季になると、彼らは遠くで聞こえる鈴の音やトナカイの移動によって倒されたと思われる草木を手がかりに湿地のなかを徒歩で探し続ける必要がある(写真②)。

9月はトナカイの交配の季節である。彼らはトナカイが発情期を迎える前に直径約30メートル、高さ約2メートルの柵(kure)をつくる。そして、彼



写真② 山中でエサを食むトナカイを探す作業。トナカイの足跡（oja）のみを手がかりに徒歩で探し続ける。（2011年7月，筆者撮影）

らは毎日夕方になると柵のなかに仔トナカイ（onnagan）を入れ，発情期で攻撃的になったオスから守ろうとする。夜間，母トナカイは柵のなかに入らず，外に放しておく。そして，彼らは朝になると柵のまわりにいる母トナカイを捕まえて柵のなかにいれ，仔トナカイを柵の外に出す。仔トナカイはやがてエサを求めて森林のなかに消えるが2～3時間もすると再び母トナカイのいる柵に戻ってくる。すると，彼らは仔トナカイを捕まえて柵のなかに入れ，母トナカイを柵の外に出す。この時期，彼らは母子のトナカイをこのように飼育する（繁殖期の仔トナカイの飼育方法に関しては後述する）。

トナカイの繁殖シーズンが終わり，10月を過ぎると大興安嶺の気温は急激に下がる。エヴェンキ族は長く厳しい冬を迎える前にキャンプ地を再び移動させる。冬季のキャンプ地に適した場所は，①水源が近くにあり，②トナカイのエサとなるトナカイゴケが多く，③木が密生しており北風を防ぐことができる地点である。彼らは，郷政府が用意する大型トラックにテントや太陽光発電装置，テレビ，寝具，生活用品などを載せて新たなキャンプ地に移動

する。その後、トナカイの群れも新たなキャンプ地に引き連れてくる。キャンプ地を移動したあと、彼らは上に述べたように onno 作業を繰り返す。

第2節 トナカイの角の商品化と販売

エヴェンキ族らがトナカイ飼養を続けるのは毎年生え替わる角を採取し、仲買人に販売するためである。ここでは、彼らの生計維持に重要なトナカイの角に関して、その商品化のプロセスや加工、販売の実際をみてみたい。

エヴェンキ族らが奇乾に住み、大興安嶺で狩猟活動を行っていた頃、トナカイの角に商品価値はほとんどなかった。当時、交易の対象であった旧ソ連人はヘラジカの角を購入していたが、それは室内の壁飾り用として価値があったからである。エヴェンキ族らがトナカイの角に商品価値を見出したのは1980年代末である。この時期、郷政府の幹部L氏がトナカイの角を北京の研究所に持ち込みその成分を調べた。すると、トナカイの角にはさまざまな薬効⁸⁾があることがわかった。この結果を受けて郷政府はトナカイの角を加工し、「中薬」の一種として販売することを考えたのである。

その後、郷政府はトナカイの角の専売制を実施し、角の採取から運搬、加工、販売までの全過程を管理した。毎年、5～7月になると郷政府は大興安嶺に点在するキャンプ地に政府関係者を派遣し、そこで採取した角の重さと所有者を記録し、すべての角を加工工場まで運んでいた。そして、加工後の角を仲買人に販売していたのである。トナカイを飼養するものはその年に政府に販売した角の重さに応じた金額を年度末（春節前）に受け取るようになっていた。ただ、当時はトナカイの角が認知されておらず、取引量は少なかったという。この時期、エヴェンキ族の生活は大興安嶺における狩猟が中心であった。

トナカイの角は1990年代中頃から徐々にその存在が認知され、「中薬」として角を購入する仲買人も増えてきたという。そして、根河市に移住した

2003年以降、エヴェンキ族らは狩猟ができなくなり、角の加工と販売を本格的に行うようになった。地方政府による角の専売制は2011年まで続けられた。それ以降、各々の世帯が自主裁量によって角を採取、加工、販売できるようになった。

さて、エヴェンキ族らはトナカイの角を以下のように加工し、商品化する。彼らはまず切り取った角を70～80℃の湯のなかに短時間入れ、角の殺菌と血液凝固を行う。その後、湯から取り出した角を室内につるして乾燥させる。角が乾燥した後、再び70～80℃の湯のなかに入れ、湯から取り出して乾燥させる。彼らはこうした煮沸殺菌と乾燥を繰り返し、最後に角が完全に乾燥するまで室内につり下げておく。その後、乾燥して軽くなった角を薄くチップ状に切って袋詰めにし、仲買人に販売するのである（写真③）。また、加工したトナカイの角を自宅で民族工芸品や「中草薬」と一緒に観光客に販売する世帯もある⁹⁾。

トナカイの角の販売価格は角の部位によって大きく異なる。トナカイの角



写真③ チップ状に加工されたトナカイの角。仲買人に販売される。

(2011年7月、筆者撮影)

は先端部分が一番よいとされ、その販売価格（加工後のチップ状のもの）は500グラムで1000元（1元＝約14円，2012年8月時点）以上である。一方、角の付け根の部分は安く、販売価格は500グラムで100元前後である。また、角は大きくて軽く、弾力性のあるものがよいとされ、そうした角の価格も高い。

角の重さはトナカイの個体によって大きなばらつきがある。体格が大きなトナカイからは1頭当たりおよそ10キログラムの角がとれるが、体格の小さなトナカイだと1頭当たり1～2キログラムしかとれない。E郷におけるトナカイの角の流通量は1998年に計548斤（1斤は500グラム）、2007年に1140斤であった（根河市史志編輯委員会 2007, 107）。現在、個々の世帯が自主裁量で角を採取し、それを仲買人に販売しているため、E郷全体で角がどれだけ流通しているのかはわからない。

第3節 ポスト「北方の三位一体」時代を生きるための技術

エヴェンキ族らは2003年に狩猟活動を止めてから角を採取するためだけにトナカイを飼育するようになった。彼らにとってトナカイは狩猟時の移動の手段から角を生産する対象になったのである。このように、トナカイの利用目的が「生業の手段」から「生業の対象」に変化するなかで、彼らはどのような技術をもってトナカイを飼育し続けているのであろうか。

本章では、ポスト「北方の三位一体」時代を生きるうえで重要だと考えられる3つの技術に注目する。その技術とは、①仔トナカイへの人為的な介入、②未馴化個体（jikei）への人為的な介入、③繁殖期に未去勢オスから仔トナカイを守る技術である。上記①と②は馴化個体を増やすための働きかけであり、③は角の商品価値を高めるための働きかけである。以下ではこれら3つの技術を具体的にみていきたい。

1. 仔トナカイへの人為的な介入

エヴェンキ族らはトナカイの所有数を増やすことで角の採取量を増やしたいと考えている。とくに、彼らが boracha と呼ぶ馴化個体は角の採取の際に至近距離で接近する人間を恐れない⁴⁰⁾。そのため、より多くの boracha をつくり、より効率よく角の採取作業を行いたいのである。彼らはトナカイを人間に馴らす作業を odachi と呼ぶ。仔トナカイと未馴化のまま成長した個体に対してこの odachi 技術によって人間とのあいだに親和性を確立させるのである。以下では、まず仔トナカイへの介入の事例をみてみたい。

仔トナカイへの介入は生後間もない時期に行われる。通常、人目につかないところで出産した母トナカイは、出産日から1～3日後に仔トナカイを連れてキャンプ地に戻ってくる。その際、エヴェンキ族らは手に塩をもち、それを舐めに来る母トナカイを捕まえ、木に繫留する。母トナカイはすでに人間とのあいだに親和性を確立しているため簡単に捕まえることができる。

その後、彼らは母トナカイのまわりにいる仔トナカイを捕まえようとする。しかし、人間に馴れていない仔トナカイは人間が少し接近するだけで遠くに逃げてしまう。彼らは6～7人が一組となり、両手を大きく広げて仔トナカイに近づき、逃げまわる仔トナカイを徐々に囲い込む。そして、仔トナカイを捕まえ、暴れる仔トナカイを男性数人で抑え込み、首紐 (comatton) をつける。

彼らは捕まえた仔トナカイを母トナカイの近くに繫ぎ止め、授乳を自然に任せる。その後、母トナカイを放つ。母トナカイはやがてエサを探しに森林のなかに入るが、数時間もすると仔トナカイのところに戻ってくる。彼らは戻ってきた母トナカイを捕まえて仔トナカイの近くに繫ぎ止める。そして、再び授乳を自然に任せ、仔トナカイを自由にする。その後、仔トナカイもエサを探しに森林のなかに入るが、数時間後には再び母トナカイの近くに戻ってくる。すると、彼らは6～7人が一組となり戻ってきた仔トナカイを再び

捕まえる。そして、仔トナカイを母トナカイの近くに繋ぎ止め、再び母トナカイを放つ。

この期間、彼らは母子トナカイの紐帯を利用し、まずは人間とのあいだに親和性が確立されている母トナカイを捕まえる。そして、捕まえた母トナカイをおとりにし、母トナカイからは離れないが人間を怖がる仔トナカイを大勢で囲い込んで捕まえる作業を何度も繰り返す。彼らはトナカイの母子をそれぞれ捕まえては放つ作業を繰り返すことで仔トナカイに「人間に触れ得る親和性」を確立させるのである。

彼らはこの odachi 技術を「仔トナカイがおとなしくなるまで続ける」という。ここでいう「おとなしくなるまで」とは人間が至近距離で近づいても逃げず、片手で仔トナカイの腹を抱きかかえて持ち上げても暴れないようになるまでである。仔トナカイは何度も人間に捕まえられることで徐々に人間に馴れ、人間が近づいても忌避反応を示さないようになる。こうした行動特性は、もちろん野生のトナカイにはみられない。

この odachi 技術は生後4～5日目の仔トナカイに行うことが重要であるとされる。生後すぐの仔トナカイに人間が介入すると「仔トナカイに人間の匂いがついてしまい、母トナカイは人間の匂いがついたわが子への授乳を拒否するから」であるという。そのため、彼らは生後すぐの仔トナカイには odachi をしない。一方、生後6～7日を過ぎると仔トナカイは人間を避けて逃げる速度が速くなるため、仔トナカイを捕まえるのに手間がかかる。そのため、彼らは生後4～5日後の仔トナカイに odachi を行うのである。

2. 未馴化個体 (jikei) への人為的な介入

エヴェンキ族らは生後間もない時期に odachi ができず、そのまま成長した未馴化個体を jikei と呼ぶ。彼らに jikei とは何かを問うと「仔トナカイのときに首紐をつけなかった個体」や「野生の方向に成長していく個体」「人間のいうことを聞かない個体」という答えが返ってくる。いずれにせよ、

jikei と呼ばれる個体は人間に馴れておらず、人間が近づくと強い忌避行動を示して遠くに逃げるトナカイのことである。

一般に、母トナカイが jikei である場合、その仔も jikei になることが多いという。これは jikei である母トナカイはキャンプ地から遠く離れた場所で出産し、その後もキャンプ地に近寄ってこない。そのため、適切な時期に仔トナカイに odachi ができないからである。

未馴化個体の角を採取する作業は非常に手間がかかる。未馴化個体は人間が接近するだけで逃げてしまうし、仮に数人の男性が捕まえたとしても激しく暴れる。そのため、彼らは暴れる未馴化個体を抑え込み、その臀部に麻酔注射を打つ。その後、しばらくして麻酔が効き、動きが緩慢になった未馴化個体の角を切る。暴れる未馴化個体を抑え込み、麻酔を打つ作業は危険を伴うため、彼らは手間のかかる未馴化個体に odachi を行いたいと考えている。

一般に、未馴化個体は人間の居住地に現れないためその発見と捕獲が困難である。しかし、蚊やアブ、ブユ、ハエが大量に発生する夏季、キャンプ地の周囲でオオミズゴケを燻していると「害虫」を嫌がる未馴化個体も煙のまわり (shamen と呼ばれる) にやってくることもある。彼らは煙のまわりに現れるトナカイを絶えず観察しており、未馴化個体が shamen に来た場合、6～7人の男性で囲い込み、投げ縄で捕まえようとする。

その後、彼らは未馴化個体を人間が生活するテントの周辺に繋留し、トナカイゴケや塩などを与える。人間からの給餌は未馴化個体の身体に人間がふれたり、腹を抱きかかえて持ち上げたりしても忌避反応を示さなくなるまで続けられる。こうすることで人間とのあいだに親和性を確立させようとするのである。

3. 繁殖期に未去勢オスから仔トナカイを守る

かつてエヴェンキ族らは所有するトナカイのなかで身体の大きな数頭のオスを種オス (shieru) として残し、それ以外のすべてのオスを去勢していた。

彼らがオスを去勢するのは、発情期（9月頃）を迎えると未去勢オスの気性が荒くなるからである。時には未去勢オス同士の衝突によって致命傷を受ける個体がいったり、人間に衝突したりする場合もある。一方、オスを去勢すると気性がおとなしくなり、より容易に扱える。そのため、彼らはほぼすべてのオスを去勢し、騎乗用や荷駄運搬用として利用していた。

ユーラシア北部のトナカイ飼養における去勢には大きくふたつの方法があるとされる（中田 2012, 54）。ひとつは、陰囊を切開して睾丸を取り除いたり、潰したりする放血法であり、いまひとつは菌などで睾丸を嘔み潰す無血法である。エヴェンキ族らによるかつての去勢方法は男性数人がオスを倒して抑え込み、睾丸を潰す無血法であった。1980年代初めからナイフで切り取る方法になった。彼らは去勢のことを *otta* と呼び、去勢オスを *inikki* と呼ぶ。

彼らはかつて去勢オスに生活用品を載せ、また老人や子どもも乗せてキャンプ地を移動していた。1992年以降、キャンプ地の移動にはトラックを利用するようになった。しかし、彼らは当時も狩猟時の荷駄運搬用として去勢オスを利用していたため、引き続き所有するオスに去勢を施していた。

その後、彼らは2003年からオスへの去勢をすべて止めた。それは、根河市への移住と同時に狩猟活動ができなくなり、狩猟時の荷駄運搬用としてトナカイを利用することがなくなったからである。オスへの去勢を止めた理由はほかにもある。それは、オスを去勢すると角の成長が遅くなり、角のサイズも小さくなる。そのため、角の採取と販売によって生活を営むようになった彼らは、より大きな角をより多く採取するためにオスへの去勢を止めたのである。

一般に、未去勢オスは発情期になると気性が荒くなり、群れとして管理することが難しい。そのため、動物の群れ管理で重要なのは所有するオスを去勢して扱いやすくすることである。ただ、現在のトナカイ飼養の場合、群れ管理を容易にするためにオスに去勢を施すと、その個体の角のサイズが小さくなり、角の商品価値が低下する。したがって、彼らは「発情期における群れ管理」と「角の商品価値の確保」とのあいだにある矛盾にどう対処するの

かを悩んでいる。

現在、彼らはこの矛盾に対して以下のように対応している。それは、トナカイが発情期を迎える前に落葉針葉樹であるカラマツ (*Larix kaempferi*) を切り倒し、それを組み合わせて大きな柵 (kure と呼ばれる) をつくる (写真④)。そして、その柵のなかに仔トナカイを入れ、発情した未去勢オスから守るのである。彼らがつくる柵は直径約30メートル、高さ約2メートルの円形状のものである。

オスが発情期を迎えると、毎日、夜間に2歳以下の仔トナカイを柵のなかに入れる。夜間、母トナカイは柵の外に放ち、採食と交配を自由にさせる。早朝6時頃になると母トナカイは仔トナカイがいる柵の周りに戻ってくる。彼らは戻ってきた母トナカイを捕まえて柵のなかに入れ、母子の授乳を自然に任せる。その後、仔トナカイを柵の外に出す。仔トナカイはやがてエサを求めて森林のなかに入る。夕方になると仔トナカイは再び母トナカイのいる



写真④ 繁殖期前 (8月中旬) に造られた柵 (kure)。繁殖期に攻撃的になった雄個体から仔トナカイを守るために使用される。

(2011年7月, 筆者撮影)

柵に戻ってくる。彼らは仔トナカイを捕まえて柵のなかに入れ、授乳を自然に任せたあと母トナカイを柵の外に出す。この時期、彼らは母子トナカイをこのように飼育することで、発情して攻撃的になったオスから仔トナカイを守るのである。柵を使用した仔トナカイの管理は毎年8月末から10月初めまで行われる。

エヴェンキ族らは柵を少し離れた場所に2カ所つくる。そして、1カ所の柵を10～15日間ほど使用すると、群れをもうひとつの柵に移す。これは、同じ柵を使用し続けると、トナカイの糞などで地面が汚れるからである。彼らは、柵のなかが汚れると仔トナカイの健康に良くないと考えている。群れを別の柵に移した後、彼らは使わなくなった柵のなかの糞を処理したり、発情したオスの衝突によって壊れた部分を修理したりする。なお、彼らは2013年から柵のまわりに格子状の鉄線を張り巡らすようになった。これは鉄線を張ることで柵の強度を高め、未去勢オスによる衝突から柵自体を守るためである。

第4節 飼養技術の「内在的な展開」

以上、大興安嶺におけるエヴェンキ族らの飼養技術をみてきた。彼らはodachi技術によって馴化個体を増やし、かつ所有するトナカイに対して去勢を施さないことで角の商品価値を確保していることがわかった。

こうしたエヴェンキ族らの対応をみてみると、彼らは狩猟と漁撈を止め、トナカイの飼養のみを続けるというポスト「北方の三位一体」時代を迎えたなかで、独自の新たな飼養技術を確立したわけではなかった。むしろ、彼らはかつての飼養技術を援用し、いわば技術の「内在的な展開」によって対応してきたのである。

ここでは、エヴェンキ族らが新たな状況に直面したなかでいかに既往技術の援用を行ってきたのか、またなぜそれが可能であったのかについて、前節までの記述をふまえながら改めて考えてみたい。

1. 既往技術の援用

第3節で明らかにしたように、エヴェンキ族らがこれまでの技術をもって対応できたのは、①もともと彼らは odachi 技術によって馴化個体をつくり、個体を識別していたこと、②トナカイは群れの輪郭が明確でなく、未馴化個体が馴化個体の群れのなかに入り混じること、がおもな理由として考えられる。

大興安嶺で生きるエヴェンキ族らはかつてトナカイを駄獣や乗用獣として利用していた。当時、彼らは狩猟の際に森林内を頻繁に移動する必要があったため、交通手段としてのトナカイをたえず手元に確保していた。また、自家消費用の紅茶に入れる乳を得るために雌トナカイも確保していた。いずれの個体も生後間もない時期に odachi が行われ、人間を恐れぬ。エヴェンキ族らは人間とのあいだに親和性を確立した馴化個体を1世帯当たり数頭から数十頭ほど所有し、森林で点在するキャンプ地で飼育していた。逆にいえば、当時、騎乗用や荷駄運搬用、搾乳用として必要な個体以外、トナカイを所有していなかった。

その後、彼らはトナカイの角の販売によって生活を営むようになった。そこで、生後間もない仔トナカイに引き続き odachi という人為的な介入をすることで、角を採取する際に容易に捕まえることができる馴化個体を所有し続けたのである。

また、角の販売に生計を依存するようになってから、彼らはトナカイの所有数の多さが収入の多さに結びつくと考えるようになり、より多くの未馴化個体に odachi を行うことで馴化個体の所有数を増やそうとした。しかし、一般に人間に馴れていない動物はその発見と捕獲が困難である。ただ、トナカイがほかの家畜動物と異なるのは「群としての輪郭が外に対して開いている」(谷 1997, 44) ことである。つまり、トナカイの群れには明確な輪郭がなく、未馴化個体が馴化個体の群れのなかに入り混じることが多いのである。

実際、トナカイ飼養の現場では、家畜トナカイの群れのなかに野生のトナカイの個体が混入することがある。ときには家畜トナカイが逃げ出して再野生化することや野生のオスとの交配さえ起こることもある。

大興安嶺のトナカイ飼養の場合でも、夏場になるとキャンプ地周辺でオオミズゴケを燻すと、蚊やアブ、ブユを嫌がる未馴化個体がやってくることもある（写真⑤）。エヴェンキ族らは煙の周辺にやってくるトナカイに注意を払っており、未馴化個体が確認できれば数人の大人が囲い込んで捕まえて上述のような odachi を行う。彼らはこのようにして馴化個体を増やしていったのである。

未馴化個体に人為的な介入ができたのにはもうひとつの理由がある。それは、エヴェンキ族らが馴化個体を識別しており、キャンプ地周辺にやってきた未馴化個体を見分けることができるからである。

たとえば、スカンジナビア半島でトナカイを放牧管理するサーメの人たちはトナカイの仔の出産の現場に居合わせないため新生子がどの母雌の仔であ



写真⑤ 煙のまわり（shamen）に集まるトナカイ。蚊やブユを嫌がる未馴化個体もやってくることもある。
（2011年7月、筆者撮影）

るかわからない。このため、新生子の所有帰属を確定するために群れを柵に追い込んで、母子の随伴の事実注目する(葛野 1990; 谷 2010)。また、1世帯当たり数百頭、数千頭のトナカイを所有する人たちは各個体に耳印を刻むことで所有帰属を表示する。

一方、ロシアのエヴェンの人たちは「大規模飼育にそれほど必要とされない分類・識別原理を、自ら所有する家トナカイに対して適用し個体識別を行い、個人トナカイをつくり続けてきた」(高倉 2000, 202)という。中国のエヴェンキ族もトナカイの色模様や体格に応じて名称をつけ、各個体を識別している⁽⁴⁾。加えて、母子トナカイの紐帯を利用して生後間もない仔トナカイに odachi を行う彼らは、トナカイの母子関係も把握している。

このように、エヴェンキ族らは自らが管理するトナカイをそれぞれ識別している。いうならば、彼らはトナカイの「認識上の群れの輪郭」をかたちづくっている。一方で、トナカイは群れに明確な輪郭がなく、さまざまな個体が入り混じる。そのため、彼らはキャンプ地に近づいてきた見慣れない未馴化個体をすぐに発見できるのである。言い換えれば、トナカイに対するエヴェンキ族らの個体認識とトナカイそれ自身の行動生態との関係が未馴化個体の発見と捕獲、馴化を可能にしているのである。

2. 郷政府の役割

これまでエヴェンキ族らの技術的な対応についてみてきた。ただ、大興安嶺のトナカイ飼養は何も彼らの対応だけで維持されてきたわけではない。彼らがトナカイ飼養を続けられるのは郷政府の働きかけがあったからでもある。いうまでもないが、中国のトナカイ飼養は採取された角を購入する側が存在して初めて生業として成り立つ。つまり、トナカイ飼養では生業技術的な対応によってトナカイの所有数を増やすだけでなく、角の買い手や市場との関係の確立も重要となる。

しかし、大興安嶺でトナカイ飼養に従事するエヴェンキ族らは、採取した

角を加工したり、市場を新たに開拓したり、漢族を中心とした仲買人と交渉したりする時間や手段がないことが多い。そのため、郷政府は職員を大興安嶺に点在するキャンプ地に派遣し、角の採取を手伝い、採取量を記録し、角を加工施設まで運び込む作業を行ってきた。また、トナカイの販売経路の開拓も主導的に行った。加えて、2003年に根河市に移住した際、郷政府は角を乾燥させ商品化する加工施設も建設した。

また、エヴェンキ族らはキャンプ地周辺においてトナカイのエサとなるトナカイゴケが少なくなると生活の拠点を移動する。移動には煙突を備えたテントや鉄製のベッド、太陽光発電装置、薪を燃料とする暖房器具のほか、日常生活用品などの運搬を伴う。移動には多大な労力が必要となる。こうしたなか、郷政府は山中を移動する彼らに大型トラックを貸し出し、移動をより円滑に行えるようにしている。このほか、郷政府は限られた集団内で交配を続けることによるトナカイの近交退化を回避するためにロシアから新たな種オスを導入したこともある。

こうした郷政府の働きかけに対して当初から「角の購入価格の設定が不透明である」や「販売の自由を認めてほしい」といった声もあったという。もちろん、郷政府による一方的な政策の決定や実施には問題点もあったと考えられる。しかし、トナカイの角の採取から輸送、加工、販売に至るプロセスを政府主導で請け負ったことで、エヴェンキ族らは大興安嶺でトナカイ飼養に専念できたことも事実である。

郷政府が大興安嶺で生活をするエヴェンキ族らを支援したり、角を商品化して販売経路を開拓したり、トナカイの生態を管理したりするには理由がある。それは、トナカイ飼養にかかわる観光開発を推し進めているからである。郷政府は、根河市に移住した際、エヴェンキ族らの歴史や生活を紹介する博物館を建設し、館内にはトナカイの角や大興安嶺の薬草を販売する店も併設した。そして、「中国唯一のトナカイ飼養の村」という宣伝文句で全国から観光客を呼び込もうとしているのである。

もともと、中国では中央から地方政府への財政支援が十分でないことが多

い。そのため、地方政府は独自の財源を求めてさまざまな事業を展開することがある。本章で取り上げた郷政府も1990年代よりトナカイの角の専売制を実施し、観光資源として重要なトナカイ飼養を支援することで観光事業を発展させ、独自の収益を得ようとしているのである。このように、ポスト「北方の三位一体」時代にエヴェンキ族らがトナカイ飼養で生活を営むことができたのは、その背後にトナカイをめぐる観光開発を推し進める郷政府の存在があったからでもある。

おわりに

大興安嶺において狩猟、漁撈、交通手段としてのトナカイの飼養という「北方の三位一体」の生業様式を長年続けてきたエヴェンキ族らは、2003年以降、トナカイの飼養のみで生計を維持するようになった。彼らがトナカイ飼養を続けるのは、簡単にいえばトナカイの角を採取し、それを販売するためである。つまり、エヴェンキ族らにとってのトナカイは荷駄運搬用や騎乗用としての「生業の手段」から、角を採取するための「生業の対象」に大きく変化したのである。

こうした変化のなか、彼らは新たな技術を導入したり、飼養技術を革新したりすることはなかった。むしろ、彼らは既往の飼養技術を援用することで引き続きトナカイを所有している。前節では彼らがこうした対応を選択してきた要因を述べた。

すなわち、エヴェンキ族らがこれまでの技術をもって対応できたのは、①もともと彼らは odachi 技術によって馴化個体をつくり、個体を識別していたこと、②トナカイは群れの輪郭が明確でなく、未馴化個体が馴化個体の群れのなかに入り混じること、がおもな理由であると指摘した。これに加えて、大興安嶺で生活をするエヴェンキ族らを支援し、角の商品化を積極的に行ってきた郷政府の役割も重要であり、その背景には郷政府がトナカイ飼養をめ

ぐって観光開発を推し進めていることを指摘した。

最後に、エヴェンキ族らがもつトナカイの馴化技術に関して、今後の課題を記しておきたい。それは、大興安嶺の事例とシベリアやスカンジナビア地域の事例との対比である。前者は角を生産するため、後者は肉を生産するためにトナカイを飼養している。いずれもトナカイが「生産の対象」であることは共通しているが、飼養技術に関してはさまざまな点で違いがあることが想像される。今後は、トナカイの飼養技術の地域的な同質性と異質性、差異を生み出す背景を検討する必要がある¹²⁾。なぜなら、トナカイの馴化や飼養技術には、寒冷な気候や積雪、それに伴う農業生産の難しさといった環境のなかで各地のりびとが自らの生活をサステイナブルに営むための知恵が隠れていると考えるからである。

〔注〕 _____

- (1) 中国の大興安嶺でトナカイ飼養に従事するのはエヴェンキ族のほか、漢族やオロチョン族、モンゴル族もいる。そのため、以下では「エヴェンキ族ら」と記す。
- (2) ツングース系言語を操る人たちは、ロシアのエニセイ川からオホーツク海に至る地域に広く散居しており、自称に基づいて北極沿岸のエヴェンと南方のエヴェンキというふたつの民族に大きく区分される(岡・境田・佐々木 2009, 252)。このなかで、中国のエヴェンキ族は1950年代に政府主導で行われた「民族識別工作」(民族カテゴリーの分析と認定作業)によって認定された少数民族である。この民族識別は中国独自の方法で行われたものである。そのため、エヴェンキ族としてひとつの民族集団にまとめられた人たちのなかには、ロシアの同じツングース系民族であるナナイやエヴェン、エヴェンキといった民族集団と言語や生活習慣の面で強い結びつきをもつ人たちもいる。
- (3) 「温量指数」は一種の積算温度を指数としたものである(川喜田 1996, 81)。すなわち、月平均気温が5℃以上になると植物が生育可能であると考え、ある地点の毎月平均気温から5℃を引いた値を積算した指数である。この指数は植物分布と密接に関係するとされる。「暖かさの指数」(warmth index)ともいわれる。
- (4) 中国における「中薬」は中医学に基づいている。日本の「漢方」も基本的には中医学に基づいているが、中医学が日本に伝わってから日本独自の発展を遂げた。そのため、「中薬」と「漢方」では病気のとらえ方や成分の配合が

異なることが多い。

- (5) 本章のフィールドデータはおもに2010年7～8月、2011年7～8月、2012年8月、2013年8月、2014年4月に行った調査に基づいている。なお、調査にあたっては、アジア経済研究所のプロジェクトのほか、JSPS 科研費(25870187)の助成を受けた。
- (6) 満歸とはエヴェンキ語で「モンゴル人が以前に来た場所」という意味がある。満歸鎮は、根河市中心部から北に約200キロメートルの位置にある。鎮の総面積は3071.8平方キロメートルであり、森林被覆率は92.4%に達する。満歸鎮の総人口は2万665人である(2005年時点)。住民の多くは漢族であるが、漢族以外にもモンゴル族や満州族、回族、ロシア族、朝鮮族などの少数民族が2986人いる。
- (7) 郷政府は根河市内にエヴェンキ族らが移住してきたことをきっかけに、市民の安全を考慮して狩猟銃の没収を行った。
- (8) トナカイの角には「益気養血、強筋健骨、抗衰老、延年益寿」の効果があるとされ、また「腰膝酸軟、滑精、子宮虚冷、神経衰弱、不眠、健忘」の改善にもよいとされる。角はチップ状に加工されており、それを温水や酒のなかに入れて飲むと効果があるとされる。
- (9) このほか、E郷では観光を目的にトナカイを飼養する世帯もある。本章ではそうした観光用のトナカイ飼養にはふれない。
- (10) エヴェンキ族らはトナカイを馴化個体(boracha)と未馴化個体(jikei)、野生個体(yesheng)の3つに分類している。borachaとは生後間もない仔トナカイにodachiを行い、人間とのあいだに親和性を確立させた個体である。jikeiは、仔トナカイの時期にodachiが行えず「野生の方向」に成長していく個体である。yeshengはロシア等にいとされる野生個体のことである。
- (11) トナカイに対するエヴェンキ族らの個体認識に関しては別稿を準備している。
- (12) もうひとつの課題はトナカイの家畜化や馴化に関することである。もともと、トナカイは狩猟民の手で家畜化された(野澤1987, 74)。そして現在、トナカイのなかには野生の個体もいれば、逆に人間の管理下で成長し、騎乗用や搾乳用といった牧畜的な利用がなされている個体もいる。現在のトナカイには家畜化のさまざまな段階を見て取ることができるのである。このため、動物の家畜化を考えるうえでトナカイを取り上げる意義は「(トナカイは)動物家畜化の発端から完成に至るヒト—動物関係の発展の中で、動物の側とヒトの側の双方にどのような進化／変化がおこったかを、生物学的、社会学的に追究するためのモデルとなり得る好適な資格を備えている」(在来家畜研究会2009, 29)という。こうしたなか、今回は取り上げなかったが、大興安嶺のエヴェンキ族らが野生の個体を馴化した事例やトナカイの舎飼を試みて失敗

した事例、トナカイゴケの分布域以外でのトナカイ飼養の事例、移動を伴わないトナカイ飼養の事例にかかわる情報を得ることができた。今後は、これら事例をふまえ、人間によるトナカイの家畜化を再検討してみたい。

〔参考文献〕

<日本語文献>

- 今西錦司・伴豊 1948. 「大興安嶺におけるオロチョンの生態（二）」『民族学研究』13(2) 12月 140-159.
- 岡洋樹・境田清隆・佐々木史郎 2009. 『朝倉世界地理講座2 東北アジア』朝倉書店.
- 川喜田二郎 1996. 「農業・林業の北限および馴鹿飼養の南限などを画する気候的境界線について」『川喜田二郎著作集第2巻（地域の生態史）』中央公論社 79-104.
- 葛野浩昭 1990. 『トナカイの社会誌——北緯70度の放牧者たち——』河合出版.
- 在来家畜研究会編 2009. 『アジアの在来家畜——家畜の起源と系統史——』名古屋大学出版会.
- 高倉浩樹 2000. 『社会主義の民族誌——シベリア・トナカイ飼育の風景——』東京都立大学出版会.
- 谷泰 1997. 『神・人・家畜——牧畜文化と聖書世界——』平凡社.
—— 2010. 『牧夫の誕生——羊・山羊の家畜化の開始とその展開——』岩波書店.
- 中田篤 2012. 「トナカイ牧畜の歴史的展開と家畜化の起源」高倉浩樹編『極寒のシベリアに生きる——トナカイと氷と先住民——』新泉社 49-68.
- 野澤謙 1987. 「家畜化の生物学的意義」福井勝義・谷泰編『牧畜文化の原像——生態・社会・歴史——』日本放送出版協会 63-107.
- 吉田陸 2003. 「シベリア・ネネツのトナカイ飼育の現在——個人経営の現状とその特徴——」井上紘一編『社会人類学からみた北方ユーラシア世界』北海道大学スラブ研究センター 67-77.

<中国語文献>

- 根河市史志編輯委員会編 2007. 『根河市志』呼倫貝爾 内蒙古文化出版社.
- 卡麗娜 2006. 『馴鹿鄂温克人文化研究』瀋陽 遼寧民族出版社.
- 孟琳琳・包智明 2004. 「生態移民研究綜述」『中央民族大学学报（哲学社会科学版）』(6) 48-52.
- 祁惠君 2006. 「馴鹿鄂温克人生態移民的民族学考察」『滿語研究』42(1) 98-105.
- 秋浦 1962. 『鄂温克人的原始社会形態』北京 中華書局.
- 王衛平 2012. 『社会変遷中的使鹿鄂温克族』中央民族大学博士論文.

中国人民大会民族委员会办公室編 1958. 『内蒙古自治区額爾古納旗使用馴鹿的鄂温克人的社会情况』北京 中国人民大会民族委员会办公室.